

私の放送人生

第12回

元毎日放送(MBS)
太田 恒一氏

割り箸で決めたMBSで
報道局に配属され、数多くの
ドキュメンタリー番組を制作



私は京都大学に5年間在籍、6回下宿を変わったが、結局クーラーもテレビもない暮らしで、テレビを見ることは無かった。そんな私が放送局に就職したのは不思議な縁だ。全共闘運動が盛んで、後半は授業も試験もほとんどなくなりレポートばかり。私はこれ幸いと5年間、大学の演劇サークルで芝居に興じていた。

しかし、友人の多くが就職したのを見て5回生の春、文学部の事務室に就職相談に出かけた。「朝日放送と毎日放送から、大学へ推薦依頼が来ている。ここにある割り箸に、4と6が書いてある」と7〜8本の割り箸の束を握り、それを引いた。それが4だった。6を引いていたら6チャンネルの朝日放送への大学推薦だったが、4の箸が4チャンネル毎日放送への入社のきっかけだった。何回かの試験を経て入社が決まったが、配属されたのは、演劇の経験を生かせるテレビ制作部ではなく、報道局テレビ報道部だった。

サツ回りから

ドキュメンタリーへ

21年間の報道生活は、型どおり、大阪府警放送記者クラブを振り出しに、市役所、府庁などを回り、この間には懐かしい京都支局やラジオ報道部も経験した。100時間の時間外労働は当たり前、総選挙になると、会議室に寝袋を持ち込んで200時間の残業と、今では考えられない無茶苦茶な職場だった。

そして、時折の内勤・遊軍の時に機会が廻ってきた。私の入社の頃はNET系列で『ドキュメンタリー現代』というネット番組があり、瀬戸内の島々を回る伊勢太神楽の一つの組を追って、アリフレックスという16mmカメラと小型の録音機で30分番組を作った。

JNN系列へ

NETがテレビ朝日となり、全国に〇〇朝日テレビという新局が誕生、テレビ朝日系列で大阪だけに毎日放送という異質な局

がある事を、業界では「大阪の腸捻転」と言った。

これが解消されたのが、昭和50年。その経緯は辻一郎氏の著作に詳しいので省くが、私にもテレビドキュメンタリーとして輝かしい歴史を持つ『テレビルポルタージュ』(テレルポ)という番組に参加する機会を与えられた。

テレルポでは当時の京都ブームを皮肉る『あなたにあなたは京都へ行くの』など4本のドキュメンタリーを作ったが、師匠として基本を教えてくださったのが、巨匠という異名を持つ石田晃三さんだ。「パンはするな」「ズームは



ローカルワイド、OA中(手前が筆者)

するな」をはじめ、原稿を徹底的にカットし、4000字詰め用の原稿用紙1枚分が1000字どころか、たった7文字だけになったこともあった。よく教えてもらったが、よく飲みもした。当時、千里丘にあった会社から梅田へ出て呑み、最後に阪急電車の雲雀丘花屋敷駅に近い自宅まで送る途中「おい！ちよつと寄つて」と十三のトリスバーに寄ること多々あった。定年を待たずに亡くなったが、懐かしい時代の思い出と、私の師匠への感謝は、尽きることは無い。

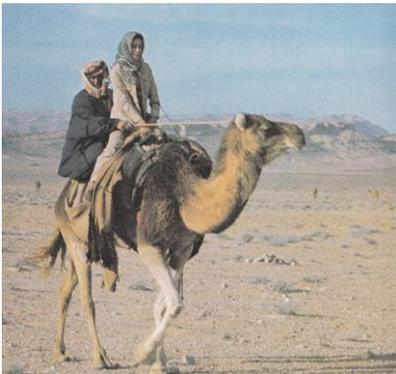
海外取材へ

初めての海外取材は、昭和52年1月、シリア・イラクへの『キャラバンII』取材だった。朝のワイド番組『おはよう700』の人気コーナー、『ビューティフル・サンデー』という軽快な音楽をバックに、ポルトガルのリスボンから東京までをリポーターと共に走破する人気コーナーで、私の担当はシリアのダマスカスからイラクのバグダッドへの旅。15分番組を10本制作し、毎日、放送するのだ。

2月のダマスカスは私たちが取材班を雪で迎えてくれた。リポーターは山形出身の土井かつえさん。典型的な東北美人だが、気が強くて何度も衝突した。しかし、地中海に面したダマスカスは果物も旨く、その上ベールを被らないシリアの女性の美しさは素晴らしかった。

古都、アレppoからローマ時代の遺跡群の町パルミラへ、訪れる人も少なく、あちこちにローマ時代の古銭が落ちていた。アレppoもパルミラも今は内戦で荒れ果てていると聞くが、せめてローマの古銭を一枚でも拾っておけばと惜しまれる。

土井さん熱望のラクダに乗ったり、砂漠の民・ベドウィン族のハ



砂漠でラクダに乗る土井かつえさん

ーレム取材では、男のカメラマンはダメだと言うので土井さんが即席カメラマンになったり、初めての海外取材は楽しい旅だった。



即席カメラマンの土井さん

この旅の収穫は意外なところにあった。フランス文学専攻の私に、それまで一度も読んだことのなかった時代小説を知ったことだ。シリア砂漠の真ん中でドライバーが教えてくれた『竜馬がゆく』にすっかり魅せられ、帰国後、司馬遼太郎など時代小説を読み尽くした。

2年後、MBS開局20周年記念番組として京大探検部をメインに、スーダンの北部にあったという女王国と、スーダン南部(現在の南スーダン)の少数民族「ロコ口族」を民俗学的に調査するド

キュメンタリーを企画した。(この時、同行した探検部の部長、吉田憲司さんが、後に国立民族学博物館の館長になるうとは、勿論予想だにできなかった)

機材はENGカメラだが、初期の頃で10kgにもなる重いアンプ部分とケーブルで繋がっていた。このアンプを担ぐのは途轍もない重労働だった。

しかし、問題はENGカメラを動かすバッテリーの充電だった。発電機は持つていくが燃料は調達できるのか？そこで松下電器(現.パナソニック)の電池部門と相談の上、太陽電池のパネルを2枚持つて行くことになった。



スーダン、メロエの遺跡にて

南スーダンの首都ジュバからエチオピア国境に近い悪路を百キロ余り、途中の宿で、南十字星を見ながら一泊して、取材班は目的地ロココ族の村に入った。



太陽電池のパネル



アンプを担ぐ技術者と
その前で撮影するカメラマン

ロココの人たちは友好的で、アツと言う間にまず子供たちが、



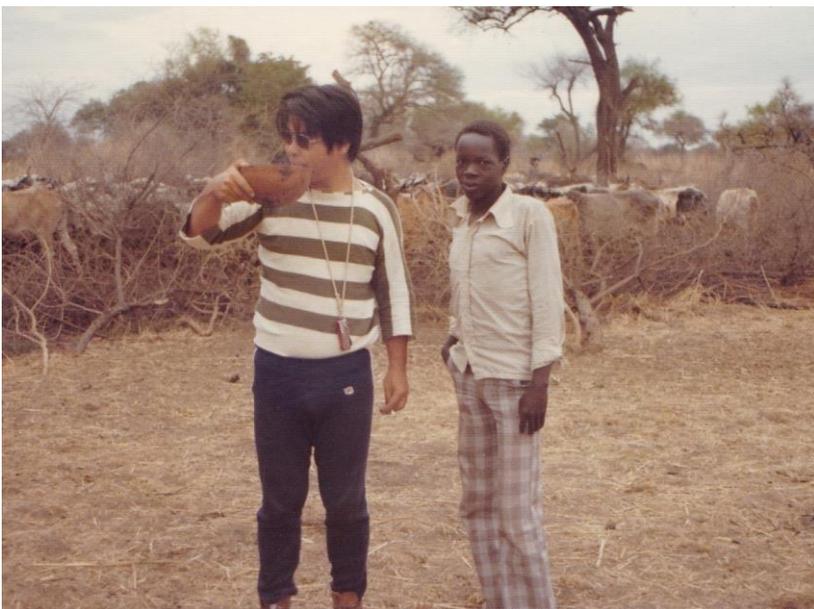
ロココは男も女もよく働く



ロココ族の子供たち

ロココの村の滞在は1か月、私たちがここに運んできてくれたガイドが迎えに来てくれるかが、唯一の心配だった。電話も無線もない小さな村。百ドル札を半分に切り、帰って来たら残りを渡すというのがたった一つの頼りだったが、約東通リ帰ってきたガイドとはその後、

そして、女や男がカメラの周りに集まってきた。男は狩りに、女はヒエの一種の穀物を作り、よく働いていた。
昼間の気温は40度を超えるが、木陰に入れば気持ち良い昼寝ができる。ロココの人たちが作る地酒を飲みながら涼しい朝と昼を中心に、取材は1か月続いた。



ヒエの一種で作った地酒が唯一の楽しみ。
ヒョウタンの器にたかるハエを追いながら飲む

日本へ招待して自宅の風呂にも入ってもらった。
(しかし、今はスーダン内戦が続き、消息は分からない)
ジュバへ戻り、冷蔵庫で冷やしたエチオピア製ビールの旨かったこと！体が震えるほどだった。生涯であれば旨かったビールはない。エレファント・ビールの小瓶はいまも私の部屋にある。

この後、文化大革命後の上海をルポした『ドキュメンタリー上海』を制作し、その後はまたもや、文明とは遠い地域のドキュメンタリー製作者となった。

『聖なる処女峰ナムナニ 初登頂』

1984年当時、未踏峰としては世界で二番目の高峰、中国・チベット、ヒマラヤのナムナニ峰(7694m)へ初登頂を目指し、中国登山協会・京大士山岳会・同志社大学山岳会の合同登山が計画された。

私の趣味はヨットで、山登りは高校時代、北アルプスの白馬岳に集団登山した以外経験もなく、興味もなかった。たまたま1972年に、チベットの高峰に、京大士山岳会が初登頂し、彼らが撮影したビデオを構成、編集したことからこの番組の企画に携わることになってしまった。

その当時、私は大阪大学の木村重信教授と協力して、南太平洋の巨石文化を探る企画を立てており、打合せを重ねていたが、上司からの命令でチベットのはる

か奥地へ偵察に3か月、登頂に4か月の山岳ディレクターになってしまった(南太平洋取材は別のディレクターに回された)。

取材予算も数千万円、失敗したときにも作れるよう様々なバックアップ取材をしたり、登山訓練や高山病に備えての低圧室に入ったりしながら、まず1年目の偵察隊に同行した。北京から空路ウルムチへ、そして、ウイグル族の町カシガルへ。そこまではホテルがあったが、以後、ナムナニの麓までは、軍隊の駐屯地や基地で泊まりながらの2千km近いキャラバンだった。



峠を幾つも越えての旅もほとんど覚えていない

道を踏み外せば数百mの谷へ落下する悪路を、ひたすら車で走ること2週間。4kmを超える峠を幾つも越えての旅は、高山病のためか、ほとんど憶えていない。

初登頂へ

翌85年4月京大・同志社の合同登山隊23名は大阪を出発、ウルムチから、ウイグル族の町カシガルへ。そしてここで中国隊と合流、コックやトラックの運転手、あわせて総勢60名

は数台の車に分乗、またもや2千kmの悪路を高山病に悩まされながら走破し、ナムナニ峰の麓に辿り着いた。

標高5600mのベースキャンプへは牛の一種ヤク60



ナムナニ頂上にて

頭を使って大量に機材を荷揚げし、ルート偵察を繰り返した。そして5月26日、第一次登頂隊8人が初登頂に成功した。現地では取材班に言い続けたのは「失敗してもいいから、無理はするな、生きて帰ろう」だけだった。

高山病で息が苦しく、食べられない毎日、楽しみは当時京大の助手だった井上治郎隊員と、後援の宝酒造から頂いた日本酒

を薬缶で沸かし、こっそりと酌み交わす夜だった。ナムナニ登山では一人の犠牲者も出なかったが、井上治郎さんは数年後、同じ中国の山を登山中、雪崩に巻き込まれ、亡くなってしまった。

※編集部より：この番組の短縮版が、YouTube (y)覧になります。



終わりに

定年退職後、大学教員としてドキュメンタリーを教えることになって、イチからドキュメンタリーを勉強する事になってしまった。存在も知らなかったドキュメンタリー研究書の古典、『ポール・ローサの『ドキュメンタリー映画』から、森達也の『ドキュメンタリーは嘘をつく』までを読み、ドキュメンタリー映画の父と言われるロバート・フラハティの『極北の怪異』から、編成部長時代の知り合いを頼りに、RKB毎日の木

村栄文さんの作品や、CBCやHBCの名作を拝借し、受講生と一緒に観た。勉強になった。しかし、こんな勉強は局勤務のときにはできなかったろうし、していたらきつと、私にはドキュメンタリーは作れなかっただろうと改めて思う。

太田 恒一 略歴

(おおた・こういち)

1971年4月
(株)毎日放送入社
同年7月

報道局テレビ報道部に配属、
記者・ディレクター、ローカル
ワイドニュース編集長などを歴
任

1994年7月

テレビ編成局テレビ編成部長

1995年1月17日

阪神・淡路大震災発生

1997年7月

テレビ編成局次長兼宣伝部長

1999年7月

テレビ編成局専任局長兼放送
運営センター長

2003年7月

メディア局長



2008年3月
毎日放送を定年退職
2008年4月
大阪芸術大学放送学科教授
に就任

2018年3月
大阪芸術大学教授を退任



大学の教え子たちとの写真と、左下は趣味のヨットを楽しむ筆者